ありすはアリスに憧れて、

莉央沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありすはアリスに憧れて、

【Ｎコード】
Ｎ５２４４Ｆ

【作者名】
莉央沙

【あらすじ】
名前はあります。もちろん日本人。そして『アリス』のお話が大好き。そんな私が学校からの帰り道。自称シロウサギに出会います。

私は『ありす』（前書き）

莉央沙はアリス大好きです！！
一応、元を読みつつ書いていったつまりだども・・・
若干キャラクターの出てく順番が違いますが気にせんで頂きたく。。

私は『ありす』

私の名前はありすです。もちろん、日本人です。
上の名前は、田中です。
歳は１７。高校二年生。
好きな物は『アリス』系の物。

小さい頃からアリスのお話が大好きだった。

本気でアリスになりたかった。
不思議の国に行きたかった。

髪も伸ばして、金髪に染めた。
残念ながら校則で染めるのが禁止なため、せめて、と言う事で短く切ってしまった。
しかも、てっぺんの方は黒くなり始めた。
ホントは、カラコンもしたかったのだが、そこまではできない。

部活は文芸部。
アリスをもとにした小説を描いたりもしている。
色んなアリス系統のサイトを見るのも好きだ。

これだけ、アリスに憧れていた私の不思議な話聞いてもらえますか？
多分妄想かなんかどと思う人も居るかもだけど・・・・

私は学校があまり好きじゃない。

体育なんか最悪。
４時間目の体育が嫌で早退したのが、この話の始まりです。

ウサギと遭遇

スカートを、理解できないぐらい短くしてる人たちが嫌い。
目ばかり力を入れた化粧をしている人たちが理解できない。
あほそうな男子たちの群が物凄く嫌い。
そんで、学校も好きじゃない。
体育なんか最悪。

私は今下校中。
まだお昼にもならないくらい。
サボりの早退なのだ。
４時間目が体育だったのだから、仕方ない。

ここは静かな住宅街。
日の光が暖かい。
スクバの中に入っているチョコが溶けないか心配。
私の学校の制服は青系統のセーラー服。
スカート丈は膝より８ｃｍ位上。
清々しい風が吹いてスカートの裾をひらひらさせる。

そんな、体育からも逃れられて気持ちのいい気候のなか散歩気分で歩いているとも少し先に妙な人物がしゃがみこんでいた。
妙な、と言うのはその人物の格好。
小学生くらいの茶髪の女の子。
ピアノの発表会で着る様な少しフリフリめの淡いピンクのワンピース。
白のブーツに・・・
うさ耳！？

髪が茶色いから、カチューシャでついているのが丸わかりだ。
しかも垂れ耳。

うわぁ、どうしよう。アノ子恥ずかしくないのかなぁ・・・。
いや、子供だし。
うん。おっさんとかがあんな格好しているより良いよ。
よし。何気ない感じで横をすぅっと、

行こうとしたときに、

「待って！！」

がしっと腕を引かれた。

「な、何ですか！？」

近くで見たそのこは、物凄く可愛かった。
茶色い髪は肩よりちょっと長くて、緩くウエーブしているのがまた
良く似合っていた。
そんでもって、この色の白さ！！
あぁ、やっぱ小学生くらいは肌きれうだぁ。
そして二重のまん丸な瞳は片方がピンクで・・・

ピンク！？

「カラコン落としたから探して！！そして踏まないように！」

あ、カラコンか。

自称「シロウサギ」

ウサギコスプレの小学生と、かがんで落し物を探す。

「目が悪いわけじゃ無いのに、何でこんなに見つからないんだろうねぇ」

何で見ず知らずの私が一緒に探さなくちゃならないんだろうねぇ。

と、

言いたい。

でも年下に対して大人気ないので、心の中で言っとく。

「ところで、お姉さん学校は？」

下を向いたまま聞かれる。

そっちこそ学校はどうなってるの。

「サボり。真似しちゃいかんよ」

「カッコイイぃ」

かっこいいのか・・・？

「あっ！！」

なに！？

「コンタクト、目の裏側にあった～」

年下でなければ殴りたい。

「お姉さんどうもありがとぉ、結局落ちてなかったけど探してくれて」

「いえいえどう致しまして」

見事なまでの棒読み。

「なんかお礼したいなぁ～、あ、お姉さんお名前はぁ？」

「ありすだよ」

小学生にフルネームばっちり紹介は何だか照れるので下の名前のみ。

「ステキ！！」

そうですか。

思わぬ反応にすこし腰が引ける。

「お姉さん、『アリス』すき？？」

「大好き。あなたも好きなの？」

小学生だろーが、アリス好きび出会えるの嬉しい。

ひょっとしたらアノ格好は白兎のつもりだろうか。

耳垂れてるけど・・・。

「あたしね、シロウサギっていうの！！アリス好きなら来て欲しい場所あるの！お願い！！」

う、そんな一生懸命にお願いされると・・・。
つかやっぱり白兎か！

「いいけど・・・」

どうせサボりで時間はいっぱい有るし。
はぁ、でもコスプレ娘と歩くのは恥ずかしいなぁ。

自称「シロウサギ」（後書き）

前回に、ありすがスカートの丈について言っていましたが作者の通う学校は「全国スカート短すぎる学校ワースト3」だそうです。わたしゃ、膝よりちょい上だけど。

入り口

「う、うわぁ・・・・」

すげぇ。

コスプレ娘ははじめに、

「駅の方にいくけどいいぃ？」

と言いつつタクシーを止めた。

駅までは徒歩約２０分。

小学生の分際でっっ！！

しかもタクシーを降りた後、

「２，３６０円です」

「はい♪」

初めてのおつかい的お財布から出したのは万札。

「細かいの嫌いだからおつり要りません～」

うさぎっっ！！

運転手さんもポーカンとしんだろぉが。

まぁ、私のお金じゃないし知らん。

そうこうして付いたのは可愛らしいカフェ。
【不思議の国】
うん。可愛いらしいお店だ。
白兎少女が連れてきたかったのはココなのか。

建物は二階建てで、優しい白い色に塗装されていた。
大きな窓が沢山並んでいた。
きっと仲は明るいんだろう。

「上がお店なのぉ」

私を手を引いて外の階段を上に上がる。
一階は何なのだろう。

「あのね！あのね！なにかおごるの！！」

そう言って戸を押し開ける。

「お、わぁぁぁ～」

中も可愛い。
めちゃくちゃ好みのお店。
今まで知らなかったのが口惜しいっ！

「すわってすわってぇ」

窓際の席まで手を引っ張られ、
座らせられた。
テーブルクロスに白い猫と黒い猫の刺繍。
スノードロップと何だっけ、黒い子猫の方・・・。

出窓には白兎の硝子かな？でできた置物。

「あれ？」

今気づいた。
お店の人が誰も居ない。
休業中じゃなかったのだろうか。

「ん？あぁ良いんだよ。知り合いのお店。下が住居になってるから
もうすぐ来ると思うよ」

ああ、そう。
頬杖を付いて窓の外に目をやってみる。
まだまだ明るい。
そしてもう一度店の中を見回す。

「あれなに？」

私がさした方にうさぎ娘も目をやる。
ソレは店の一番奥にある扉。
プレートが掛かっていて、
【不思議の国　入り口】
と書いてある。

「ん？なんかねぇ子供用？みたいな感じで帽子屋とかヤマネのぬい
ぐるみがテーブルに座っておままごとの食器とかが散乱してるの。
大人が入っても面白いけど。行く？」

私はもちろん頷いた。
何故かスクバは持ってきた方がいいと言うの従って、

扉を開ける。

「かわいいいぃぃ！！」

思わず声が大きくなった。

明るいお部屋。

照明は一切なし。天井にある大きな窓から日の光が入って来ている。

テーブルの上に、（おままごとと言っていたけど）雑貨屋さんある様な食器が並べられている。

お茶菓子はフェルトで作ったようなフワフワレプリカ。

やべぇ、もろ玩具なのに食いてぇ。

一歩テーブルに向って踏み出した時に、

後ろから軽い駆け足の音が聞こえた。

とんっ、

と私のすぐ横で軽く床を蹴る。

動きまでうさぎかよ。

振向こうとした時に

ミシリ。

足元から嫌な音。

「え？」

次の瞬間には物凄い音とを立てて床に穴が開く。

私も負けない位の絶叫。

「だぁ～いぶ♪」

楽しそうに自称白兎も飛び込んできた。

落下中

ってか、
ありえんだろ！！？？
なんでこんな床もろいっ。

「あ～りすぅ」

ひゅるる、
と隣に兎が並んで落ちてきた。
元凶めっ！！
憎らしいほど可愛く白い耳がはたはたはためいている。

「あ？あぁ！？」

耳だった。
中がわがうすピンクに色づいている。
しかも、カチューシャも付いてない。

「ふぅ、やっぱ耳押さえつけてると痛いねぇ・・・」

「それ、本物？生耳！？」

生耳なんて言葉あったかしら・・・
指先で触ってみる。
うん。
フワフワさらさらの毛並み。

「ん。本物♪だって兎の耳生えた人間なんて、政府に捕まって解剖

されちゃう！！」

うぅん。隔離はされるかもだけど、
日本政府は多分そこまで未確認生物に興味ないだろ。
多分。

「本当に白兎なんだぁ・・・・」

あぁ、何か私どっかで眠ってんじゃ。

「だからシロウサギって名乗ってるでしょぉ、でも日本語訳版不思議の国のアリス二代目シロウサギだからなぁ、ハーフなのぉ。茶色い黒目の耳たれ兎との・・・・」

ハーフって、
兎と人の？
イヤイヤ、アリスの白兎さんと茶色のうさぎさんのだよ。
うさぎさんって私いくつ？？
私が脳内で色んな事をもんもんと考えてるのも無視で、兎は喋り続ける。

「それでねぇ耳は白かったんだけどさぁ、髪は茶色じゃん？目も片目でけ黒いしぃ、コンタクトのお手入れ大変だしね？イメージ壊さないようにするのも大変なんだよ。。耳垂れてるし」

今は落下しているから耳は上の方になびいてるよ。
って、そうだよ落下！！
なんでいつまで経っても地面につかない！！
二階から一階だよ？
一瞬じゃん。

なのにどーよ。
確実に２分は落ちてる。
明らかにおかしいだろ。
今時速何ｋｍ？

まだまだ落下中

落ち始めて小一時間がたってる。
あんまりにも落ち続けるもんだから、
空中に静止してる気分だよ。
隣の兎は空中で頬杖ついて寝そべっている。
もう地球の反対側に出てしまうのでは・・・？
・・・。
重力があるからソレはないか。

「ひまぁ～」

私も暇だよ。
心内での突っこみ。

「ありす、ケータイの番号教えてぇ」

のんきだ。
兎ががさりと携帯を取り出す。
物凄いデコレーション。
元の色が分からんほど、薔薇やらリボンやらが表面に張ってある。
全体的にピンク。

「赤外線するから貸してぇ♪」

「ハイ」

私のはめちゃくちゃシンプル。
真っ黒な携帯に黒猫のストラップ。

スクバから出して手渡す。
いけないいけない、落ちてると言う事実を忘れそう。

「ありすのケータイ重っ！！」

兎の手に渡った瞬間、
白兎の落下速度が急に上がる。

「私のよりあなたの方が明らかに重いよ！！」

「容量がぁぁぁぁ！！」

容量！？
兎が尾を引く叫びを残してドンドン下へ行く。
容量は重力関係ないよ！
あ、でも確かにいっぱい入ってる。
アリス画像が。
可愛いからついつい、溜め込んでしまっ、
私一人になったらどうすんの？
また何時間も一人で落ち続けるとか、暇すぎ！！
白兎ぃぃ、戻って来いぃ！！

『ありす～着水する時は水面に対して垂直にねぇ！足曲げたりすると骨が折れるよぉ！尾てぇ骨とかぁ！』

下のほうから兎の声が上ってきた。
ソレより、

「着水って！？」

着水

兎が消えてからぐの事だ。

『１０ｍ←プール』

でかでかとした黒文字で書かれていたので落ちながらでも読めた。

「じゅ、１０メート！？もうすぐじゃ、」

どぶん。

落ちた。

水の中に。

芸人がプールに飛び込んだりして大げさなリアクションしていたが。

マジで痛いっ！

「っぷは、」

プールの縁につかまって深呼吸。

周りを見回して青くなる。

青々とした芝生の広がる草原に、絵に描いたような空に、不思議な草花・・・。

もちろんそれに驚いたが、がですよ、

私が今青くなってるのは、

「プールちっさ！」

深さはそれなりに有ったが幅が子供用ビニールプール並み。直径一

メートル。
今は上手く水の中に落ちたが地面むき出しなトコに落ちていたら・・・
全身粉砕。
こわっ！

私はそそくさとプールから這い出す。
制服ももカバンもびしょ濡れ。

「ってあれ、兎は！？」

辺りに居ないのに気づいてキョロキョロ見回す。

「・・・・」

すぐに見つけた。
ただし、それは兎ではなく兎が居た形跡。
地面に、隕石でも落ちたような穴。
それと穴のすぐ近くに、地面に突き刺さった私のケータイ。
そして可愛らしいメモ帳に書かれた伝言。

『ありすえ。
地面に落ちちゃったし（笑）
服汚れたからいったんおふろ入りに帰るねぇ
後であいましょ♪
byぷりちぃシロウサギ（笑
ps，ありすのケータイ電池ないよっ（＊ノД、＊）わーん』

うざっ！！

政治家レース・・・？

おそらく異空間であろう場所で私が一番最初にしたことは、
スカートをしぼって水っ気を取る。
足にまとわりついて気持ち悪いし。
う～ん我ながら落ち着いている。

「しっかし、自分の落ち着き様が怖い・・・」

ここは多分不思議の国なのだろう。
なんだこの私の順応性は・・・。
前世は何所でも生きれるゴキブリかしら？
あ、なんか寒気がした・・・。

「まったく、兎はどこ、に・・・」

私は辺りを見回そうとした。
でも一周見回す前に動きが止まる。
鳥が居た。
可愛い小鳥さんではない。
ＲＰＧ何かで見られる様なゴツイ怪鳥。

一拍置いて。

「やーーーー！！」

濡れた服のままポカポカな草原をダッシュ。
大きな鳥は飛ばずにがっぽがっぽ走ってくる。
兎ぃ！！

一人にしたこと恨むぞっっ！
年下だからってなんだ！

5分間位、スカートなのも忘れて全力疾走。
チラッと振り返る。
まだ付いてきてる！！
って、これはもしかしてあれかな？
涙の池でびしょびしょになった生き物たち。
グルグル走って体を乾かした・・・、
政治家レース？（私の読んだ本はそう訳されていた）

「鳥ごっつ過ぎるだろ！？」

逃げてばかりじゃいかん！
そう思って何か使える物は無いかとカバンを漁る。
走りながらだと実に探しにくい。
電池切れのケータイ。
絶対だめ！
チョコのお菓子。（円すい形で底辺部分が茶色のチョコ。上部分がピンクのアレ）
これなら良し。
振向きざまに投げてみる。

「よしっ！」

声に出てしまう。
思いもよらぬ食いつき！
今度からア〇ロは常備しよう。

「あ、服、乾いてる・・・」

相当必死に走ってたようだ。

政治家レース・・・・？（後書き）

お話上、『不思議の国のアリス』の順番どうりにキャラが出てくれません。。

いもむしちゃん

あちゃぁ・・・。
ここ、どこだろ？
ごつい鳥からひっしで逃げてたら、
なんか森の中に迷い込んでいた。
うぅ～ん。
一応道はついているし真っ直ぐ行けばいつか出れるよね。

「おねぇさん！」

呼び止められた。
さて、一体誰が？
きょろきょろと辺りを見渡すと、

「ここだよぉ～～！！」

声のした方には色鮮やか（すぎて毒茸にか見えない）なキノコがわっさわっさ生えている一角があった。
中でも一際毒々しく、デカイキノコの上に声の主が居た。

「何これ」

ものすごっつ小さい人が居た。
体長２センチ程度の。
緑の服を着ているのは分かるが、
あまりにちっさすぎて、良く分からない。

「お願い！そこの蛍光ピンクのキノコとってわたしに食べさして」

訳が分からず、取り合えず言うとおりにする。
うへぇ毒ありそう。
爪の先で摘むようにして持ってく。
有ろう事かその人物は
『俺は毒あんだぜ！俺様に触るなぁ！！』と
主張しているキノコをパクリとかじった。
そしてぐんぐん大きさが伸びる。

「うっわ・・・」

アリスのお話は大きくなったり縮んだりしてなんぼだけど、
実際見るとキモイなぁ。。
大きくなった人物はそれでも幼児サイズ。
ってかきっと幼児なのだろう。

緑色の園服に、
黄色いヘルメット（安全第一の文字）に、
黄色の長靴に幼稚園かばん。
名札は黄色のひよこの形に『いもむし』
どうやら芋虫のようだ。

「たすかったよぉ、うっかり縮むキノコばっかり食べちゃってねぇ」

こくんと、
短いツインテールの頭を傾げる。

「ところでおねぇさん誰？」

「ありす、だけど・・・」

ありすなんだけど、
（多分）不思議の国でそう名乗っても良いのだろうか。
や、本名だから！
自身を持って、自分！！

「え、アリスなの！？たいへんらぁ『芋虫の役目』をしなくちゃ～」

そう言って幼稚園かばんをごそごそしだした。
・・・・。
やっぱ、ありすって言わない方がいいのかな？

『きのこの森』

うぅん。
いいのか、これ？
いもむしに手渡されたは、

『きのこの森』

との商品名のついたお菓子の箱。
何だろう。
すごくよく見るよ。
こんな感じのお菓子。
いいのか？
セーフなのか・・・・？

「あぁ、一応ありがとお」

ものすごく棒読みで答えてしまった。
芋虫の子はそれでも満面の笑み。

「いぃのいぃの！芋虫はアリスに茸をあげるんだよ～」

両手をブンブン振り回しながらご機嫌だ。
でもコレ、チョコレート菓子だよ。
茸じゃないよ。
菌類じゃ、

「・・・・」

「・・・♪」

お互い顔を見たまま痛い沈黙。
なんかすごいイイ笑顔でこっちみてる！！

「え、っとぉ～・・・」

「なになに！？」

何を言おうっ、
あ、あ、そうだ！
白兎の所在地とかっ！
あいつ着替えに行ったんだよな。
ちっ。

「白兎って言うのに茶髪の・・・」

ウサギの家はどこ？
って聞く前に、

「あっちぃ～！ここねぐぅんて行ってね、キラキラしたとこなのっ」

テンションたけぇ。
それに子供の言葉は抽象的で分かり難いっ！
まぁ、とりあえずこの道をまっすぐ指してる分けだし、
まっすぐ『ぐぅん』って行くとするか。

「どぉもありがとぉ」

今度は割りと棒読みっぽくなく言えたのに、

芋虫はまた毒々しい茸を
『どれにしよぉ』
などと選んで、聞いちゃいねぇ。
まぁ、いいか。
てくてく歩き始める。

芋虫が園児なのもアレだが、
おっさんでいろいろ説教じみた事聞かされるより、いっかぁ。
と思いつつ。
『ぐぅん』と進んでる。

なんでもアリです。

もっしゃもっしゃ。
ゴクン。

あ、味も同じだぁ～・・・
円錐型のチョコを鳥に投げつけてしまったから、
『きのこの森』なる怪しげな菓子を食べてみた。

中身を見たときは捨てようかとも思ったが。

カラフルすぎんだよ。

赤に青、蛍光オレンジ。
喰えるかっ！！

その中に茶色や白のじみぃな色のもあったから、
それらを見つけ出して食っている。
毒々しいのは自然に帰した。（捨てた）
良いよね。『茸』なんだし。

それにしても、なんだかどんどん植物が大きくなってる気が。
まぁ不思議の国何でもあり、

「だよ・・・ぁあぁぁ！？？」

前方に何かいる！！
何あれ！？
熊、くまなのか！？

え、うそ、こっち来とるがなっ、
なんかもっさもっさした一見可愛いけどすごく大きいのがっ！

「ハァ、ハァ、」

赤い舌を出して寄って来たのは犬だ。
白くておっぽの丸まった顔の横の毛がやたらもっさりした犬。

「で、でででででかくねっ？！」

大型犬とかそんなレベルじゃなく、私を一口飲み込めるぐらいの大きさ。
おかしいよっ！
前足が私の胴体より太いってっ・・・・・。
あれ、そういえば・・・。犬だけじゃなくて周りもデカイ。
え、なに、コレは私がちっさくなってるの？

うわっ犬きたっ！！
グダグダ悩んでたらでかいわんこが鼻先近づけてフンフンにおいを嗅いでる。
食われる・・・・？
茸と言いつつチョコを捨てた罰ですか？？
余にも重すぎやぁしませんか！！

もう人生終るっ、と思った瞬間どこからか声が聞こえる。

「ジョセフ、おいでっ！」

ふぅん。
と残念そうな鳴き声をあげてワンちゃんは顔を上げる。

向こうからわっかになったままの首輪が付いたリード（鎖と言うと犬好きの知人が怒る）と、目の前の犬と同じようなのを二頭連れて掻けて来る人影が見えた。

犬はちゃんとつないどいてくれよっ！

私は心中でぼやいて、そいつが来るのを待った。

白兎宅。

「あ、どうも・・・」

目の前にでかい、紅茶の注がれたカップが置かれた。
ここは白兎の家らしい。

さっきの犬を追いかけてきた人物はメアリ・アンと名乗った。
その人は、白兎宅にて、お手伝いさんをしていると言った。
そいで、ウサギ宅まで、連れてきてもらったのだが、
だが・・・

目のやり場にめちゃくちゃ困るっっ!!
芋虫のキラキラぁなとこと言うのは、全くもってそのまま真実だった。
家の中が、やたら可愛らしい・・・
何だコレは!?お人形さんの家かっ!奴の携帯の拡大版みたいな、

「うっ」

きょろきょろしていた視線が壁の一角で止まる。
りょ、猟銃??
なんて場違いな。

「どうした?」

前方から声がしてうっかり見てしまったから、不自然に顔を背けてしまった。

ここのお手伝いさんは、向かいのソファーにどっかり座ってる。

「あ、あの、一つ言っていい？何で男の子がメイドさんみたいな格好してんの・・・？」

とうとういっちまった。

だって気になったんだもん。。

犬を追ってきたとき、思わず噴出した。

どう見たって、中2か中3の男子が黒いメイド服を着ていた。

「・・・俺だって着たくて着てんじゃねぇよ。『メアリ・アン』としての役をがあんだよ」

お手伝いなのに、態度でけぇ・・・。

「お前さぁ、気づけよ。性別が逆転すんだよ。二代目は。まぁまれにそのままってことも有るけど」

一拍おいて、メアリが小さいわたしを見下ろして首を傾げる。

「で、お前、なんでそんちっこいんだよ」

森での一部始終を話した。

「馬鹿だろ？あの芋虫のお菓子は、地味な色を食べると縮むんだよ。気をつけろよ。ホント馬鹿だな。オオバカだな。・・・。ちょっとまってろ。確か、ウサギが何か虫から貰ったのが有るはずだ」

「・・・・。ありがとお。」

とか言いつつ、
何だよ、人のこと馬鹿馬鹿って、
年下のクセに。

「おら。コレ食え」

前にドスンと置かれたのは、

「マーブルチョコ・・・・？」

コレなら元が色鮮やかだから、何とか食えるかも・・・。
うぅん、ピンク（蛍光色だけど）ならまだいけそう。
よしっ！！

かじ。

一瞬、貧血起きたみたいに、ふらって視野が暗くなった。
すぐに頭がしゃっきりして辺りを見渡せば、元の大きさになってソファに座っている。
メアリがマジマジとこっちを見てる。
何だか視線が痛い。

「で、お前誰？何？何の用？」

さっきから腹立つ物言いだな。
まぁ、助かったけど。

でもやっぱり腹たつから、全ての問に簡素かつ、そっけなく答えてやった。

「田中ありす。日本人の高校二年。白兎に用。わかった？」

どんなもんだと腕組みしてみる。

「あぁ、『アリス』ねぇ～へ～そう。へぇ」

何か、尚腹立ってきた・・・。

「じゃあ、ありす。残念ながら主は今留守にしております」

「え、だって風呂は入りに帰ってないの？」

「あ、この家今給湯器点検に出してるから。ほら、例の無料点検の・・・」

不思議の国に、あの会社あんのっ！？

兎にでんわ

▽

豪奢な造りの部屋で、彼はいつもどおりに午後の紅茶を楽しんでいた。

ぶーぶー。

これまた豪奢な机の上で、やたらめったらデコレーションされたケータイが震えた。

彼は思わず紅茶を吹きそうになった。

彼の携帯ではない。大事な大事な年の離れた親友の物だ。

どうでもいいが、机をもぞもぞ動きながら派手なケータイは不吉な音を連動で流している。

磁器のカップを置き、彼は立ち上がる。

周りに控えた召使たちがついて来ようとするが手を振って留め、一人で歩き出す。

城の中のプール並にデカイ風呂の戸を開けた。

開けた後に、入浴中の人物がメスなのを思い出した。

「あ！なに勝手にとぉ開けてるのぉ？」

白いたれ耳のウサギが風呂に浸かっている。浴槽の外に腕だけ伸ばしてゲーム機で遊んでいた。

耳が頭のてっぺんにあるので、殆ど意味を成さないシャンプーハット着用中だ。

「・・・・。携帯がなってましたよ。っていうか、風呂に玩具持ち込まないっ！！湯船に落として感電したらどうするんですか！あと、

人んちでどっぷり長湯しない！それからあれだけ携帯を飾っておきながら何故着信音が「エクソシスト」のアレなんですか！？」

「ちゃんちゃんちゃんちゃ、ちゃん、ちゃん～♪」

「聞いてますか！？」

「きいてるきいてる。陛下、お聞きしてますわよぉ～。あ、マンボウ釣れたっ！！見て！マンボウ！」

いったい何のゲームをしているのか・・・。

「これで１００００ベル稼げたぁ！！ね、ね、お家の代金払い終わるかもぉ」

「それまで湯に浸かりつづける気ですか？電話が鳴ってたていいましたよ」

「いいよ、いいよ。どうせメアリからだから～。帰りに醤油買って来いとかだよ～・・・。酷くね？ご主人様をぱしりするんだよぉ」

「いい加減、お風呂でゲームは止めなさいっ！あっ、またお菓子持ち込んでっ！！お風呂なら帽子屋のところに行きなさい！！」

「もぉそんなこと言って、遊びに来てもらうの嬉しいんでしょ～」

この２人、いつまで経っても会話がまとまり終わる事は無いようだ。

△

「出ない」

辛抱強く受話器を握っていたメイドさん（男な上に偉そうな奴）はそう仰った。

「ちょーど今まさに風呂入ってんだろ」

家の主のウサギが居ないもんだから、メアリ・アンにケータイに電話してもらったのだがどうも出ないらしい。

「わたしゃ、どうしたらいいんでしょぉーねぇ？」

こっちは色々腹が立ってきた。
数十キロ（推定）を落下し、プール（ビニールプール並みの表面積）に着水し、ＲＰＧみたいな鳥におっかけられ、ちっちゃくなって、態度のでけぇお手伝いさんにイライラさせられ・・・。
もともと男って、嫌いなのに。

「風呂つってんなら、帽子屋のトコに行けよ。居ると思うから。地図描くのめんどいから口頭でいうぞ？一回で覚えろよ。そんで紅茶飲んだらとっとと行け」

出る前にこいつ一発殴ってもいいかな・・・？

お茶会に行ってみる

態度のでけぇ女装野郎（ついにここまで後退）に教えられた『帽子屋』のとこに向かうべく、早々に白兎宅を辞した。
ずっと居たら禿げそうなんだもん。
ストレスで。

明らかにウザそうなお顔でメアリは玄関まで送ってくれたが、
ばしゃっっ！
と出た瞬間戸を閉められた。
しまった。
殴る暇もなかった！！

庭先には先ほどの熊が三頭繋がれている。
うん。普通の大型犬だ。
寄ってみる。
でっかい柴犬？？
あ。秋田犬かな？

「う」

首輪に名前がついていた。
曰く、
『ジョセフィーヌ』
『コーデリア』
『ぽち』
最後だけ手抜きだ。
あの兎、ネーミングセンスが・・・。

うけ狙いかしら。

「じゃーねー」

さっき食われそうになったから、今度は高い位置から見下ろしてやった。

よし。

良くか。

ここからそんなに遠くないはずだし。

よし、がんばるぞ。

うん・・・・。

歩くのめんど。

せっかく体育サボったのになぁ。

今度は道ではなく森んなかを木の数を数えながら歩く。

庭出て左にすぐそれて、いち、さん・・・7本目で九十度曲がる。

これ道案内??

人を迷わせる為の罠なんじゃ、

次5本先の木、と。

そう言えば、『狂ったお茶会』メンバーって全部男だったような。

雰囲気的に。

あれ?

じゃあここでは全員女の子??

めっっめしぃ〜!

何この想像しただけで抱きしめたくなる光景はっ。

おっと、ここで右に三本。

┃お止めなさい!この馬鹿兎が!!

┃うるせぇお前の言うとおーりにしてたら、いつまで経ってもケーキ食えねーよ。

―嫌！！口に物入れたまま喋らないで！見てて不愉快です！
―こっち見なきゃいいだろ。お前となんか顔あわせたくねぇし。
―ちょ、ぼろぼろこぼさないでよ！テーブルを汚さないで！

なんか、騒々しい。
あんまり向こうに行きたくない。。

でも、まぁよかった。
罠じゃ無かったみたいだし。

お茶会メンバー

あぁ、変な人だったらやだなぁ。
でも行かなくちゃね。
んで、兎が居たらお手伝いさんを新しく雇う事を勧めよう。
あいつを首にしてな。

がさがさっと木陰から出てみれば。

「！！！！！」

うっわぁ、うっわぁー！！！！
世界的に有名な黒い鼠の彼女がいるっ！
（まぁアレね、頭に赤いリボンのっけた鼠の着ぐるみパジャマね）
っつか、顔ぶれからして、あれやまね？？
鼠が鼠の着ぐるみ？

すっげぇ、天然金髪青目のお人形ちゃん見たいな子がいる！
羨ましぃ、あんな格好してみたい。
ゴスロリいいなぁ、ゴスロリ。
あ、何か私変態っぽい・・・。

ん～ん。
さて、どう話かけたものかねぇ～。
こーゆうの苦手だなぁ。

「おい！」

ぶすっと、頬を何かで突かれた。

「俺を無視すんな！！」

ちろっと目線を向けたら茶髪の兎が砂糖のスプーンでほっぺ突っついて来ていた。

「そりゃ、悪かったね。でもいま兎に恨みを抱いているから。ってか人の脳内読まないでよ」

白い子と違って、空に向かって伸びた茶色い耳を揺らしながら、三月兎（推定）がまだスプーンでぐりぐり突いてくる。

焼き兎にしてやろぉか・・・。

兎って美味しかったけ？

私のおじいちゃんは食ったらしいけど。

「ってか、止めてよ、スプーンでグリグリすんの！！」

「そうよ！！やめなさいよ馬鹿兎！！人間の表皮にはたっっっくさん、菌が居るんだから！汚いじゃない！」

金髪のゴスロリちゃんが割ってはいる。

けど、そっち？？

なんか私汚物扱いですか？？？

この人達にどう接しろと？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5244f/

ありすはアリスに憧れて、

2010年10月12日15時19分発行